

松沢 そうです。沖縄高専で、その爆破を研究している人がいるんですよ。熊本大学で爆破の研究をしている学部があって。ダイナマイトとかの衝撃について研究しているそうなんです。いかに効率よく爆破させるかっていうのをやっているらしいです。で、その先生が沖縄の高専に行って、いろんな果実とかに当てると細胞が全部壊れて、そこから無駄なくジュースが取れるという研究をされていて。熱を加えなくていいので、有効な成分も壊さずに、おいしいジュースが採れるっていうのをやったりしています。それを漆に使えるかということで、相談して、じゃあやってみましょうっていうことでやっています。

松沢 そうですね。新聞で見て、相談しようかなって。

金野 もともと漆って一本の木から、牛乳瓶1本くらいでしたっけ。

松沢 そうですね。200グラムくらいしか採れない。

金野 それがその方法だとどれくらい？

松沢 理論上は6倍採れる。ただ、水分が多めになるとか、品質の問題はあるんですけど、量はそれだけたくさん採れる。衝撃を与える方法じゃなくても、他の方法がないかっていうのはやっているんですけどね。今までの漆掻き以外の方法で、効率よく採れるんじゃないかっていうのはいろいろチャレンジしています。

金野 プラス、あとはその活用方法をどう生み出すかっていうことですよ。

松沢 漆は塗料として使うので、いろんな建造物とかいろんなことに使えるので、加工すれば使えるものにはなると思っていますね。

金野 じゃあ需要する場所はあるんだけど、供給が追いつかない。

松沢 全然手で採っている分だけでは間に合わないくらいですね。3倍以上採らないと需要に応えられない。それを新しい方式でできないかというのでやっています。

金野 日々漆ですね。頭の中。

松沢 そうですね。漆しかない（笑）

金野 どうしてそんなに漆に魅せられたんですか？

松沢 やっぱり自然界にあるモノとして、こういう完璧なモノってあるんだなっていうことですよ。普通に塗ればそれだけでツヤもありますしね。なんでこんなに美しいものをつくる意味が樹液としてあるのかなって。傷つけるとかさぶたみたいに修復するだけのものなはずなんですけど、人間がそれをうまく使いこなすとすごい美しいツヤとか色合いがでるんですよ。

金野 あとあれですよ。昔は矢じりの接着に使ったりだとか。接着剤としても。

松嶺 矢じりってなんですか？

金野 縄文時代に使っていた、矢の先の石の部分。

松沢 それをくっつける材料として漆を使っていたんですよ。

金野 だから結構生きるに直結しているんだなと思って。生命を維持するための、動物的な道具だったんだなって。

松沢 接着剤として使えるというのがありますし、塗料としても使えるとか、防腐剤にも使えるとか、いろいろ漆から良さを引き出していたわけですよ。だから塗料として見ると、自然界のもので見ると漆が一番。それしかないっていうのもあったと思いますし、一番最善のものだったんですよ。だからそれをずっと恵みとして、木を植えて育ててきたわけですね。人間と共生っていう話がありましたけど、漆と人間は共生してきた歴史がある。最近それが忘れられているというか、森林もそうですし、人と生きてきたのにあんまり意識が向かなくなっている。

金野 金継ぎとかね、それこそ漆ですよ。拓海くんも積極的にやっているよね。

宮本 金継ぎをやっているの、そこで漆を使っていますね。

宮本 自分の家のものしかやらないんですけど。

松沢 最近金継ぎは世界的なブームになって。金継ぎって言葉は普通に使われていますからね。世界共通。金継ぎもやっぱり瞬間接着剤でやるようなものも出ているんですよ。漆を使わないで。それは金継ぎと言えるかどうかっていうのがあるんですけど、修復することによって新しい美しさが生まれるっていうのは世界中にどんどん日本初の文化として、すごいことだと思います。

金野 精神性が伝わってきたような。

松沢 その上で漆の価値が伝わればすごいことになりますよね。

宮本 どっちかっていうと漆継ぎですもんね。

松沢 金を蒔かない場合もある。漆でくっつけて、金を装飾として蒔いているので。

宮本 漆で止めてもかっこいいんですよ。

松沢 焼き物で使う場合が多いですけど、ガラスでも使えますし、この間やったのはランプシェードとかを金継ぎして、それをやるとすごい美しさがでますね。壊れたものを直すっていうのは日本人が得意としていることなので、新しいアートに昇華しているっていうのがすごい。